



受賞団体紹介

紅葉街道と妖怪によるまちおこし

藤川谷の会

「ゲゲゲの鬼太郎」の名脇役として有名な児啼爺は、日本民族学の父と呼ばれた柳田国男氏が昭和13年に発行した妖怪名彙で、山城町上名地域に伝わる妖怪として紹介されました。

この伝承を後世に残そうと、上名地域で紅葉の植栽活動等を行う藤川谷の会が、インターネット等で募金を呼びかけ、児啼爺の石像が平成13年に建立されました。藤川谷の会はその後、地域に伝わる

妖怪伝説の発掘や妖怪の着ぐるみの作成、妖怪ハウスとして2棟のツリーハウスを建設しました。また毎年秋に開催し、妖怪行列や妖怪鍋が人気の妖怪紅葉まつりには多くの来場者が訪れており、今年も国民文化祭の協賛事業としての実施が予定されています。

現在は、平成20年夏の世界妖怪会議の開催をめぐり取り組みを進めており、新たな妖怪伝承の発掘、着ぐるみや妖怪ハウスの作成など、妖怪による地域活性化を進めています。

藤川谷の会	大賞
祖谷からくり舞台保存会	優秀賞
活彩祖谷村 滝合重要伝統的建造物群保存協議会	優良賞
祖谷口チャレンジ21	
黒沢の田植えおどり保存会	



わがまちの自慢もの

三好市自慢ものコンテスト  
藤川谷の会が大賞を受賞

5月から6月末にかけて三好市が募集した「三好市自慢ものコンテスト」の大賞に、妖怪伝承によるまちおこしを進める藤川谷の会が選ばれ、8月30日に入賞6団体とともに表彰されました。魅力ある地域の宝を再発見し、地域のつながりを強め、特色あるまちづくりを推進することを目的に広く募集したこのコンテストには、市内22団体からの応募がありました。

今月号では、入賞6団体の魅力ある取り組みなどについて紹介し、まちづくりや地域力について考えていただければと考えます。

わがまちの自慢もの

あなたは「三好市の自慢もの」と聞いて何を連想しますか？ある方は「剣山や吉野川の雄大な自然だ」と思っているかも知れません。またある方は「地域の慣習や文化だ」と思っているかも知れません。「様々な分野で活躍する団体や市民だ」という方もいるでしょう。

おそらく、それらすべてが正解で「三好市の自慢もの」でしょう。そしてその根底には、「住んでいる地域が好きだから、もっと自慢できる住みやすい地域にしたい」という一人一人の思いもあるのではないのでしょうか。

しかし近年、過疎化や少子高齢化、生活様式の変化などにより、地域を取り巻く環境は大きく変わってきました。

地域力とは…

阪神淡路大震災以降、地域力という言葉をよく耳にするようになりました。人と人とのつながりを重んじたり、自然や文化を大事にしたりする慣習は、日本人の心に流れているものです。少し昔の日本では、地域の中で助け合いながら田畑を耕したり、冠婚葬祭等で助け合ったりというように、人々の生活は地域で支え合いながら営まれていました。また今日のようにテレビやインターネットなどから情報を得ることができなかつた時代は、地域という社会で生じる

ふるさと応援基金に  
4,368,000 円のご寄付をいただきました

三好市は、本年3月30日に住民参加によるまちづくりを推進する財源確保の為にふるさと応援基金条例を公布しました。

この基金には、9月30日までの半年間で15の個人様、4の団体様より、計4,368,000円のご寄付をいただきました。誠にありがとうございました。

三好市では、引き続き寄付を募集しておりますので、皆様のご協力をお願い致します。

項目別寄付額一覧

観光資源の維持と景観の保全	32.4口	162,000円
文化財の保全と活用	4.0口	20,000円
住民自治の醸成とコミュニティ推進	3.0口	15,000円
循環型社会の構築に関する事業	3.0口	15,000円
人材育成に関する事業	202.0口	1,010,000円
その他市長が必要と認める事業	629.2口	3,146,000円

ご寄付をいただいた方々

団体	
近畿山城大步危会 様	(大阪府)
遊トラベル株式会社徳島営業所 様	(三好市)
井下建設有限会社 様	(三好市)
個人	

愛媛県	川人 明美 様
三好市	池本 正 強 様
三好市	片山 修 様
大阪府	森上 修 様
徳島市	秋田 忠昭 様
三好市	長尾 武 様
三好市	中田 勝義 様
徳島市	朝田 元子 様
三好市	山下一郎 様
三好市	又森 子ヨ子 様
兵庫県	南部 揚子 様
	匿名希望の方々 (5人)

皆様、本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願ひします。



黒沢の田植えおどり

**黒沢の田植えおどり保存会**  
黒沢湿原には、徳島県下はもとより全国的にも珍しい田植え唄が江戸時代から唄い継がれてきたと伝えられています。時代の推移や高齢化とともに、黒沢の田植え唄は忘れ去られようとしていましたが、平成9年5月、保存会によって再現されました。

保存会では、この田植え唄を後世に伝承するため、毎年秋に行われる黒沢湿原まつりに出演し、地域の活性化に協力しています。また、地区の敬老会や市内の社会福祉施設などへの慰問出演や市の文化祭りなどにも積極的に出演し、黒沢の田植え唄を広く知ってもらう取り組みにも力を入れています。



元気あふれる地域社会に

**祖谷ロチャレンジ21**  
祖谷ロチャレンジ21は、活力と潤いのある地域社会の形成を目的に、合併前から池田町・大利・川崎・山城町下川地域の広域交流活動を積極的に進めてきました。打上花火がお盆の夜を彩る夏フェスティバル、秋の味覚を楽しむ秋フェスティバル、色鮮やかな

イルミネーションがきらめく冬フェスティバルと四季を通じたイベントが続けられているほか、地域の安全を守る活動や花いっぱい運動やサイクル運動などの取り組みを実施しています。今後も、地域福祉や地域づくりの推進役として、人材育成を図りながら元気あふれる地域社会形成を目指しています。



山村集落からの発信

**落合重要伝統的建造物群保存協議会**  
東祖谷には、先人たちが築き上げた歴史や文化が色濃く残されており、一昨年12月には落合集落が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。協議会では、落合重要伝統的建造物群のすばらしい姿を守り発展

させるために、保存地区の建造物や石垣等の保存修理、案内板等の設置を行っています。また特産品の開発やボランティアガイドの養成にも力を入れています。今後は、保存地区への理解、伝統的技術の継承を促すため、農作物の栽培や石積み等の体験活動を行い、山村体験の定着によって地域の活性化を目指しています。



田舎を誇りに 活彩祖谷村

**活彩祖谷村**  
活彩祖谷村は、村の心、温もり、絆を守り伝え、東祖谷地域の活性化を住民自らが考える仮想の村として平成18年3月に誕生しました。発足当時41人であった活彩祖谷村の村民は、現在では173人も増加し、北海道や沖縄などから参加されている方もいるようです。

独り暮らしのお年寄り宅に赤い旗を掲げてもらい一日の無事を知らせる「元氣印の赤旗運動」は、地域で支え合うことで安心、安全な村づくりに一役買っており、茅葺屋根の保存や補修、民泊の推進、都市住民との交流、子供たちとの自然体験などを行うことで、体験型観光としての発展も目指しています。



祖谷襖からくり舞台

**祖谷からくり舞台保存会**  
西祖谷山村後山地区には、全国的にも珍しい構造を持つ襖からくりが継承されています。昭和30年頃から姿を消していた襖からくりは、数年前に郷土研究会の調査で発掘されました。その後結成された祖谷からくり舞台保存会は文化庁の補助を得て、襖の

修復、からくり技術の伝承指導を受け、一昨年には50年ぶりの襖からくり公演が実現しました。保存会では、今後、襖からくりを保存するだけでなく、独創的なからくりの方法を継承し、村の伝統行事を再興することから、大歩からかすら橋までの中間的観光資源として定着させる取り組みが行われています。

課題を、知恵を出し合って解決するのが当たり前でした。それは、もしかすると必要に迫られて形成された力かもしませんが、元々、地域に備わっていた力であって、体と言う自然治癒力とか免疫力に似たようなものかも知れません。ところが近年、少子高齢化の進行や価値観、生活様式の多様化などによって人々が地域で集まることが少なくなってきたことから、地域と人とのかわり方が変化し、こういった流れがやや途絶えてしまっていることに気がきます。

その一方、地震が起こったときの対応や子供たちの安全などを考えると、不安や課題を抱えているということも事実であり、地域に頼らなくてはならないものが数多くあることにも気がきます。

そんな時代だからこそ、昔の日本にあった地域本来が持つ力というものが見直されてきたのではないのでしょうか。

**地域づくり II 人づくり**

ただ、すべて昔が良いということではありません。受け継がれた過去の知恵を生かしながら、今の時代に合うように形を変えていく。そういう意味で言うと、今回受賞された各団体の取り組みはまさに地域力であり、合併し広大な行政区域を持つ三好市においては、これらの各団体の方々の活動がますます必要になってくるでしょう。もちろん他にも数多くの市民の方々が、個人あるいは自治会で、グループで、様々な地域おこしの活動を続けています。地域の絆を深めている公民館の分館活動、地

域コミュニティに重要な役割を持っている伝統芸能など、実に様々な分野で地域のために動いている人が大勢います。これからは、心の価値を見直す時代。地域力は人のふれあいと支え合いによって信頼関係を築き、生きる意欲を生み出す力とも言えます。「人」「地域」「行政」が丸となってそれぞれの役割を担い、昔からある知恵を生かしながら今風にアレンジする。そうすることで、地域に潜んでしまった地域力がよみがえってくるのではないのでしょうか。

地域とは、そこで暮らす人々が主役です。暮らしやすい地域にすること。ここで暮らしたいと思うような地域にしていくこと。それは地域の人々と共に考えることであると思います。ですから、「地域づくり」というのはその地域を担う「人づくり」ということができるのです。

そしてこういった力が、三好市の雄大な自然などとともに、これからも「三好市の自慢もの」となるのではないのでしょうか。

課題を、知恵を出し合って解決するのが当たり前でした。それは、もしかすると必要に迫られて形成された力かもしませんが、元々、地域に備わっていた力であって、体と言う自然治癒力とか免疫力に似たようなものかも知れません。ところが近年、少子高齢化の進行や価値観、生活様式の多様化などによって人々が地域で集まることが少なくなってきたことから、地域と人とのかわり方が変化し、こういった流れがやや途絶えてしまっていることに気がきます。

その一方、地震が起こったときの対応や子供たちの安全などを考えると、不安や課題を抱えているということも事実であり、地域に頼らなくてはならないものが数多くあることにも気がきます。

そんな時代だからこそ、昔の日本にあった地域本来が持つ力というものが見直されてきたのではないのでしょうか。

**地域づくり II 人づくり**

ただ、すべて昔が良いということではありません。受け継がれた過去の知恵を生かしながら、今の時代に合うように形を変えていく。そういう意味で言うと、今回受賞された各団体の取り組みはまさに地域力であり、合併し広大な行政区域を持つ三好市においては、これらの各団体の方々の活動がますます必要になってくるでしょう。もちろん他にも数多くの市民の方々が、個人あるいは自治会で、グループで、様々な地域おこしの活動を続けています。地域の絆を深めている公民館の分館活動、地